

ひとりごと

恩師

先日、10年ぶりに恩師とお会いした。

小学1年生から剣道を始めた私が最初に出会った道場の先生で、原点はここにあると断言できるほど全てを叩き込んでくれた人だ。当時は先生もイケイケの20代。小学生だろうが女兒だろうがお構いなしの厳しい稽古で、何度過呼吸になり、何度涙を流したかわからない。今でも先生の愛車を街で見かけると、あの頃を思い出して、思わず苦笑いしてしまう。

そんな先生とのエピソードで今でも忘れられないものがある。

翌日に県大会を控えた前日の稽古で、中学生（足のサイズ28cm。忘れもしない。）に足を踏まれた。稽古中にはよくあることなので、あ～痛いな～程度だったが、翌朝も痛みは引かず、会場に着くころには左足がパンパンに腫れていた。

片足でケンケンしないと歩けないくらい痛いにも関わらず、先生は「気合が足りん!」と怒鳴る。アップもままならぬまま、いざ試合開始。不思議なことに試合中は痛みを感じることはなく、あれよあれよと決勝まで進んだ。負けたら怒号が飛んでくることへの恐怖心が痛みを麻痺させたのだろう、まさに恐怖政治。

決勝ではさすがに足が動かず引き分けとなり、チームとしては準優勝という結果で終わった。問題はその後の反省会である。

案の定お怒りの先生は私を見て一言、「お前がもっと動いて勝てば優勝できた。」と放った。…いや…足痛いのには試合出て、最後の試合以外は全勝の私にそれ言うんか…これが理不尽か…と幼な心に思ったのを鮮明に覚えている。もちろん言えるはずはない。

翌日病院で検査した結果、なんとヒビが入っていた。よく試合できたと逆に褒めて欲しいくらいだったが、先生は「それを早く言え!!」とまた怒る。理不尽極まりない、私にとっての衝撃の思い出である。

ほかにも色々なことがあったが、総じて先生には感謝をしている。

社会人になり、年の離れた先輩と熱い議論（という名の口喧嘩）が出来るメンタルの強さはもちろん、小言に対するスルースキルは、確実にあの頃の厳しい指導のおかげで得たものだなあと実感している。10歳の少女が衝撃を受けた大人の理不尽さに比べれば、先輩からの要求も小言も全く大したことはない。

ぶつかりながらも割と自由に仕事をさせてくれた先輩の元を離れ、私は、この春から研修生として派遣され、念願の東京生活を開始した。自治体とは違う圧倒的スピード感到に驚くとともに若干引きつつも、充実した環境下であつという間に3カ月が過ぎてしまった。

せっかくの貴重な機会。もっともっとアンテナ張っているんな事を吸収して、持ち前のメンタルの強さで仕事をこなし、公私ともに東京生活を満喫したいと思う。

(M.O)